

「ゲツセマネの祈り」とその周辺

字野輝

(五) 十字架への戦い。福音と律法(2)

「神の言を託された人々が、神々と言われているとすれば」は、詩篇八二・七の引用で、この場面の一般的解釈としては、彼等が条文の枝葉末節に拘泥するを捕えて、イエス様が「旧き時代に聖書にも、王や立法者が民を指導する神の言の委託を受けた者として、神々と言われた事例があるではないか。」との反論であるが、あえて、この詩句を引用されたイエス様の内意は――神の言葉を委託されて民を指導すべき筈の汝等一味――サンヘドリン議長で現大祭司ヨセフ(カヤパ)前大祭司アンナス等を鋭く風刺する。それはこの句の前の句が「彼等は知ることなく、悟ることもなくて、暗き中をさまよう」であり、続く句は「しかし、あなた方は人のように死に、もろもろの君のひとりのように仆れるであらう。神よ、起きて、地をさばいてください。すべての国民はあなたのものでからです」と続く。彼等は、イエス様の言わんとする真意を直感した。

しかもあえて、その場は屈辱に甘んじた。情勢不利!彼等は群衆を怖れた。神の面よりも。しかし、この場面が如何に息づまる

危機であったかは、十・39のあとに十一・8を続けて読むと解る。「よき羊飼いの」比喩と共に、引用なき詩篇八二篇全体が如何に、この場面に適切痛烈な攻撃であることか。

当時の人々はイエス様の面影の中に旧約最大の予言者エレミヤをみた(マタイ・十六・14・ヨハネ・四・44)。イエス様を決して時勢にうとい単なる宗教家ではなかった。紀元三〇年十月十八日に、ローマで、それまで権力をほしのままにできたセヤヌスが、皇帝テトウスへの反逆罪で捕えられて処刑された。セヤヌスに阿諛迎合してきたユダヤの指導者共は、大祭司はじめ、総督ピラトも、ガリラヤのヘロデも連座問責を怖れて、右往左往、ひたすら己が地位の保身に、民衆のまえに醜態をさらけだした。ヨハネ福音書十章のイエス様の「よき羊飼いの譬」は、自らの負われる御使命と時勢に迎合する民の指導者共への鋭い批判を含む。狼は勿論ローマをさす(ローマの七つの丘の発生神話)。歴史の事実と併せ読む時、死を賭して彼等民の偽れる指導者に攻撃の矢を放つと共に使命に歩まれるイエス様の真実を思う。

やがて父なる神様の定め給うた時が来て、サンヘドリンの法庭に立ち給うたイエス様に、大祭司カヤパが、違法な審理手続を弄して、死刑宣告に陥れる最後の切り札とした訊問が「あなたが、讃むべき者の子、キリストであるか」であった。既に神様の聖意志を悟っておられたイエス様は、あえて否み給はなかった。議会の運営上幾多の違法があつたにも関わらず、この老巧な誘導訊問

は、権力に屈した議員達が裁決に当って反対発言を封じて余地を残さなかつた。彼等は、正義よりも、自らが瀆神に荷担する者と見做されることを恐れた。

註、大祭司カヤパは通称の公職名―予審判事の意。実名はヨセフ(シユタフファア・「イエス」 p 170)。在職18―36。辣腕老獪。前任大祭司アンナスの婿である。

アンナスの大祭司在職は6―18なるも、引続き神殿の財政管理を専断し、イエス様の審問の頃(32年春)も、尚議會で隠然たる実権を握っていた。逮捕後のイエス様が、まずアンナスの館に連行されたのもそのためである(ヨハネ十八・13)。神殿境内で商人共と結託して、上納金をせしめていた彼にとつて、イエス様の「宮潔め」は、不快な憎しみを買ったであろう。

イエス様はこの時も地上の似非権威を「強盗の巢」(エレミヤ・七)と痛罵して天からの権威を主張し給うた(マルコ十一・15―18。27―33)。神殿侮辱罪。

(六) ゲッセマネの夜

ユダが去つてから刻がたつた。夜半をまわつたであろう。情況の渦は既に中心に向つて泡立ちつつあつた。人の子、イエス様の心は、残された御自分の最後の時を、神様との応答の祈りの中に身を投じ、確信を求めて、この園に向われたであろう。そこには何か、死地に狩り立てられるものをすら感ずる。

園に着かれたイエス様は、弟子達を見張りに立て、最も身近いペテロとヤコブとヨハネを引連れて園に入られた。その時突如、イエス様に恐怖の戦慄が走る。それは独語(ひとりごと)でもあつたらうか。「心がめいつて、死にたいくらいだ」と。標高千米の四月のエルサレムの夜半は焚火を要する寒さである。夜気が朋に迫つたであろう。しかし、それにも勝つて、今、イエスの心に荒涼たる死の世界が展開する。神様と切り離された孤独と、罪を負つて降るシエオールの世界である。悲哀が身を包む。

イエス様の赤裸な心が、思わず弟子達に祈りの協力を求められた。そこにイエス様のありの儘の自然をみる。ルカ二二・41によれば、イエス様は三人の弟子達の所より更に「石を投げれば届くほどの所に」、園の奥に進まれ、突然崩ほれる如く「うつむけに倒れ」伏して祈つて言われた。「お父様、出来ることなら、どうかこの杯がわたしの前を通りすぎますように。しかし、わたしの願いどおりでなく、お心のとおりになればよいのです」と。(塚本訳)

黒崎先生がルカ福音書註解の中で、この場面(二二・44)の「イエス悲しみ迫り、いよいよ切に祈り給えば、汗は地上に落ちる血の雫の如し」を「悲しみ迫り」は苦闘に陥り、後半は「血の雫の如き汗は地上に落ちたり」と訳すべし、と言われる。この怖るべき場面の意味するものは果して何か。

マルコに残された、イエス様が父なる神様に祈る呼びかけのラミ語、「アバ、お父様」。

マルコは屢々、ギリシャ語では表現しきれない切迫した場面に、イエス様が語られた、なまの言葉を、そのまま残す。エレミアスが指摘するように、「このアバという神への呼びかけは、どのユダヤ教の文献にも類例がない。この風変りな事実は、アバ（愛するお父さん）が（ユダヤでは） 〓 筆者加筆 〓 日常家庭の言葉であつて、誰もそれを神に用いたことがなかったという事情から解明される。イエスはそうする権威を持つておられた。つまりイエスは、子がその父に対するように、ご自身の天の父に向かって信頼にみちて話しかけられる……」と。（エレミヤス・「イエスの譬え」 p211・新教・善野氏訳）

註、エレミヤスのこれに続く言葉を、今少し紹介させて頂こう。「ここに、マタイ十八・3を解く鍵が見出されるであろう。すなわち、〈アバと言うことのできるのは、子供である〉。

「もしあなたがアバということを学ばないならば、あなたは神の国にはいることはできない。」 「再び子供のようになる」についてこの解釈は、その単純さと、それが福音の中心に根を下ろしている事実によつて支持される」と。感銘深い言葉である。

このイエス様の祈りを黙想する私の心に浮かぶ聖書の、いま一つの箇所は、創世記二二章のモリヤの山で、独り子イサクを神に捧げるアブラハムの情景である。

「そこでアブラハムは若者たちに言った、「あなたがたは、ろばと一緒にここにいなさい。わたしとわらわは向うへ行つて礼拝し、そののち、あなたがたの所に帰つてきます。」アブラハムは燔祭のたきぎを取つて、その子イサクに負け、手に火と刃物とを取つて、ふたり一緒に行つた。やがてイサクは父アブラハムに言つた、「父よ」。彼は答えた、「子よ、わたしはここにいます」。イサクは言つた、「火と薪とはありますが、祭の小羊はどこにありますか」。アブラハムは言つた、「子よ、神みずから燔祭の小羊を備えてくださるであろう」。こうしてふたりは一緒に行つた。(5-8)。

父と子と一重として二重写しに、父なる神と子なる神と一罪の贖いの燔祭をめぐつて。黙想していると、息苦しいばかりのものを感ずる。アブラハムには、その刃を押しとどめる神様があつた。しかし、ゲッセマネの夜、神様の聖決意を押しとどめる者はない。父なる神嫌の膝にしがみついて「死に物狂いに祈られた（ルカ・塚本訳）イエス様の悲哀と苦悩、そして、「アバ・お父様」の声を神様もまたどのように受けとめられたであろうか。

過ぐる戦争で最愛の者をむしり取られた方にして、アーメンと独りつぶやかれるであろうか。

パウロとイエス様の著しい相違は、パウロは彼の手紙のいたる所で口をちりにつけて、己が罪と苦悩を告白する。しかし、私達

は四つの福音書のどこに、イエス様が御自分の罪を告白なさる場面を見出すであろうか。

清冽透徹、罪の片鱗もとどめ給わぬイエス様が、今、御自身を死に裏切ったユダをも含めて、私達自身でもはかりかねる罪の膿汁一切を背負って、罪人とされて父なる神様と断絶の深みに処刑され給う。それは私共の鈍い良心を超える問題であろう。

人類の歴史を支え、貫く神様の聖義、ヘブライ思想に脈々と流れる神の愛とは、「神の愛は怒り審く、審かざるは神の愛に非ず」、それは、ルウドルフ・オットーの名著「聖なるものに」に於て指摘する如く「愛は猶ほ食い尽し焼き尽す」「怒」そのものと明白に関係している。「愛は消えた怒に外ならない」と（山谷氏訳四章3項）ゲッセマネの祈りこそは、人類の罪の贖いをめぐって、聖にして聖なる萬軍のヤハウエの神様と、メシヤなる使命を負わされた御独子の神との、聖意志と切禱との激突の聖夜であつたと思う。一度、二度、三度、「活ける神の御手に陥るは畏るべきかな」（ヘブライ・十・31）。ヤハウエの傾け給わんとする審判の怒の杯。愛なる神様が、全信頼を傾けてよりすがる御子なるイエス様に、私共の罪をおしかぶせて、呪いの木に呪い殺さずばすまない父なる神の怖るべき罪の処分！

ゆるがぬ厳かな聖義がここににある。

私達の黒い黒い罪の塊が、イエス様と共に終に一とたび灰となる迄。

愛なる神の何という非条理、何という不合理！しかも、「理解せられる神は、神に非ず」ーテルステエゲン（オットー・「聖なるもの」五章より）。十字架の贖いこそは畏るべき神様の公義を支える最大のパラドックスである。

私は今、ここに今より三十余年前、或秋の夕暮れ、信仰の恩師金沢常雄先生より承った一つの話を書きとめよう。それは私の学生時代で、多分「信望愛」誌の宛名書きのお手伝い後にお伴をした武蔵野の散歩道であつた。矢内原先生が厳しい時局と戦いつつ既に召された藤井武全集の再刊を刊行して下さつた当時であつた。

日本の隠された予言者である藤井先生は、既にその最愛の者（のぶ子夫人）を召され、幼いお子さん達を抱えて、窮貧の中で妥協を許さぬ福音の戦を進めておられた。ある冬の夕刻、先生はお子さんの使つた金の出所に不審を抱かれた。書斎の火鉢のそばに呼んで問い訊かれた。しかしお子さんは頑強に、どうしても白状を拒まれたという。部屋の中はもう薄暗く火鉢の炭火が赤かつた。親子二人、黙然と対座して、目をつぶって腕組していられた先生が、突然、鉄の火箸をその炭火の中に突込まれた。やがて赤く焼けた火箸を握られた先生が、お子さんの目の前で、腕をま

くつて言われたという。「おまえの白状しないその罪を、お父さんも一緒に神様の罰を受けよう」。火箸は先生の腕に押しあてられ、肉の焦げる煙があがった。その時、先生の膝にしがみついて赦しを乞うたお子さんは、一切を白状されたという。(金銭は御家庭内のことであつたとのこと)。

嗚呼、義、義によらざる愛は、終に愛の名に価しないのではないか。

私は且てソ満国境の荒涼とした陣地の冬の夜、小さく狭い病室のベッドで見とつた若い兵士が、(或はバイカル湖に近いシベリヤの密林の中のラーゲル(收容所)の寒いベッドでも)恐らく生と死の駆けめぐる夢うつつの境から、残した最後の声を聞いた。彼は風土病で下痢が激しくて、栄養失調で骨と皮に黒ずんでしまった。禁止されていた水を欲しがった。最後に軍医がもう駄目だ、飲ませてやれと許可がおりた。彼は訣別のコップ一杯の砂糖水を、一口、二三口、ゴクリ、ゴクリと飲んだ後、「お母あさーん、お母あさーん」。その声が次第に小さく細く、凍てついた窓ガラスに空しく消えた。彼の生命の火と共に。そして彼は解放された。敵しい生との闘いから。その時、私は声もなく見守つた彼を羨しいと思つた。

この陣地で生きることの苦しみから、彼の魂は今解放されて、租国の彼のふるさとに帰つてゆくのであろうと。あの満州の野空を渡つて南に帰つてゆく雁の如くに。

今、私はこの原稿を書きつつ、母を慕うあの青年の声と、イエス様の「アバ・ホ・パーテル」(嗚呼、お父様!)の声が二重にかさなる。

註、私は又この経験を通じて、人間―イエス様に重く重くのかかった御使命を果された暁に、弟子達にガリラヤに行け、ガリラヤで又会おうとおっしゃつたお心が解るように思う。マルコ十六・七。

荒涼とひろがる孤独である。弟子達とイエス様の距離、そこによこたわる深淵は、到底石を投げてとどく距離ではない。ゲッセマネを蔽う闇の中で激闘数刻。全宇宙がこの瞬間を祈りをこめて見守つた(ロマ・八・19―22)。

人類の運命が、この一刻に賭けられていたことを、福音書のルカは「そのとき天から一人の天使がイエスに現れて、力づけた」と。「イエスはもだえながら、死に物狂いに祈られた。汗が血のしたたるようにボタボタ地上に落ちた」と。(二二・43

44・塚本訳

私は恐らくこの時、死の苦しみにまざるイエス様の祈りに対して、神様の応答は一切なかったものと思う。祈られても、祈られ

ても、ハネ返される鉄の如き沈黙の意志。唯、そこにおかれた最悪の条件と思われる細い暗い途を聖旨と信じて捺印されたと思ふ。

神様は語り給わない。人生の岐路に立たされて私達が祈る時もそれを経験する。唯、細く狭い困難と思われる途が黙っておかれています。祈って、信じて、決心して一步をその途に踏むこむほかはない。その他のよい方法の途を選ぶとする時、心に濁りを感じず。

唯、狭く細い途丈に濁りがこない。細い否定の声がない。踏みこむ第一歩の途は不思議に細くつづくのである。五年、十年、十五年の後、歩ませられたその道をふりかえるとき、白い恩恵の指跡をみるのである。何よりの恩恵はそのことを通して信仰が支えられることである。

弟子達は眠りこけ、夜は深い。イエス様がゆき場面を失って佇まされた時、視よ！闇の中に既に逮捕のたいまつが、エルサレム城門からこちらに向って動きつつあった。

その時、決然とイエス様に決定の道があった。終に崩れなかった沈黙の意志こそ聖旨の道であると。

「時が来た。そら、人の子は罪人どもの手に渡されるのだ。立て。行こう。見よ、わたしを売る者が近づいてきた！」と

(マルコ・十四・41B 42、塚本先生訳)

註、ゲッセマネの記事の中で、「ルカ二二・43 44はCーシリヤ・Dーペザーカルピンの弟子I写本にあるも有力なBーバチカーンI写本に欠くという。あまりにも生々しい人間イエスの姿が神の子に相応しくないと考えたためか。しかし文体語句共にルカ的である」由。黒崎先生・高柳氏註解に学ぶ。

註2 岩波文庫中に、ルドルフ・オットーの名著「聖なるもの」が加えられている。

イエスの受難研究(四)

捕縛

マタイ二六、四七〜五六

マルコ一四、四三〜五〇

ルカ二二、四七〜五三

ヨハネ一八、三〜一一

参照

半田 梅雄

一 ユダの裏切について

イスカリオテのユダが、裏切りをして、大祭司連や長老たちから派遣された大勢の捕縛者たちを伴って、イエスに近づいて来る。そこでイエスに接吻すれば、その人が闇違いなくイエスであることが確認されて、イエスは直ちに捕縛される。そういう台図があらかじめ決められていた。この危機にのぞむイエスと弟子たち

ちの大きな相違を昨夜来学んで来た。殊にナルドの香油のエピソードは、非常に深い意味を示してくれる。元来、ユダヤ人にとって頭に香油をそそがれることは、特別に神によって選ばれた王、救い主を意味した。弟子たちの眼には、マリヤの仕草が、単なるムダごとか、ぜいたくに見えた。しかし、すでに十字架への道を自覚しておられるイエスには、マリヤの愛の業が、父なる神によって聖別された者になされるはなむけと感ぜられたのである。ユダの反逆はこの事件の直後に決定的となる。地上のメシヤへの期待が、いかに当時のユダヤ人に強くあつたか、イエスの尋常ならぬ力を見ている弟子たちが、イエスに一般のユダヤ人以上の期待をかけたとしても不思議ではなかつたといひ得るのである。地上的、現世的救済に期待をかける弟子たちに、イエスは全く異なる方向を示される。期待が大きければ大きいだけ外れた時の失望は大きい。ユダは完全にイエスに失望する。その時サタンはユダの心を完べきに挿んだ。ユダの転絡は絶壁を駆け降りるような早さで、愛から憎しみへと変つてゆく。「人の子を売るその人は、ああかわいそうだ！生れなかつた方がよっぽとしあわせであつた。」（マタイ二六の24）とイエスは嘆かれる。愛しても、愛しても、逆く者を呼び戻すことは出来ない。結果的にユダは激しい後悔のちに自殺をする。このどうにもならない不幸な役割の実演を、私たちは、他人ごととして見過すことが出来るだろうか。

私たちが一人の人間として、一步誤れば、ユダの道を歩む可能性がなくてはならない。ユダとイエスの決裂というより、ユダのイエスに対する決定的な敗北の行程を、私たちは生々しく実感し、息を呑む思いで見つめて来たのである。

二、イエスの苦悩

ゲッセマネの園におけるイエスの祈りが、ルカの筆によれば、血のしたたるような汗を流されつつなされたという。しかも一度ならず、二度、三度、その間眠りこけてしまう弟子たち。なぜそのような苦悶が、ゲッセマネでイエスを襲つたか、私共に、量り知れない深い意味が、そこに横わっているようである。

本日学ぶ捕縛では、ゲッセマネの三度の祈りの後における極めて微妙な変化かも知れないが、私には何か、イエスが、その大きな慟哭を越えて、御自身に負わされた道筋を真直ぐに進んでゆかなければならないお覚悟をされたことが、この力所から読みとることができるよう思う。

先程、詩篇を読んで頂いたが、「私の神様、私の神様、なぜ私をお見棄てになりましたか」という十字架上での叫びは、また再び慟哭と混迷の中にイエスを引きずり込んだのかも知れないが、少くも、二十六章四七節から五六節では、イエスは、御自身に負わされた十字架上での死の意味づけについて、神からつき離

されたままの状態で、歩まざるを得ないということを、理解されておられたように思う。

人間のない方をすれば、さわやかというか、ある激突的な状態を過ぎて、氣ばったものいい、女々しい涙めいたものもなく、静かにむしろ決然と敵を迎える様が、眼に見えるようである。

三、神の子の証明、避けがたい十字架への道

ここで、イエスが「救い主」である。あるいは、「神の子」であるという意味について、一体何によって、それが証明されるかを考えてみたい。

ゲッセマネの園における激しい慟哭と祈りを通して、ひとり十字架への道を突き進んでゆくイエスの姿は、誰の眼にもいたましいと映ずると思うが、それにもかかわらず、十字架は、どうしても避けることができない道筋であったのかどうか、そのへんが一番問題だろうと思う。逆な立場からいうと、イエスが「神の子」であるということ、十字架及びその後に起る復活を除いて、考えることができるかどうかである。もっと具体的にいえば、十字架と復活のないイエス伝によって、キリスト教が今日このように生き続けたかどうかである。

はからずも、昨夜、宇野さんからお話が合ったように、イエスの時には、キリスト教はなかった。当時は、ユダヤ教のみがあり、そのユダヤ教の中に、公生涯としては、わずか二〜三年（あ

るいは長くても四〜五年といわれる）そのわずかな期間に、イエスが、異端的な形で、あるいは、新興宗教の小さな教祖的な立場で、活動した範囲、影響というものは、それ程大きくはなかったのではないか。

だから、もし、十字架なしに、イエスが、単に道徳的な教師、倫理的意味の強い教祖俗にいう立派な人格としてだけの存在で、たとえユダヤの国の村々町々で、やや多くの人々に接し、語りかけ、天寿を完うして死んだとしても、その結果はどうだったろうか。

その人によって、果して、人類のすべてに関係ある人間の持つ底知れない罪、暗黒面が、神さまの前に明白にされることがあったであろうか。

イエスの十字架の際、散り散りになった弟子たちが、イエスの復活昇天後にわかにかに強いものにされてゆく事実。このことは史実として疑う余地がない。彼らは、十字架と復活の事実から決定的な影響を受けたのであって、生前のイエスの教えのみで決定的に造り変えられたわけではない。彼らは、十字架と復活を眼のあたりにして、始めて、生前のイエスの教えの中身を明確に理解することができたのである。十字架と復活の光を通さない教えや戒めは、師の危急を見棄てて逃げる弱さしかなかったのである。

小さな私にとつても、この十字架こそ、私の罪を明白にするためにどうしても必要であった。また、ゲッセマネにおける祈りの

態度によつて、イエスは本質的に神の子でありながら、現実的に徹底した人間であられた証拠と考えられる。人間の底の底にある罪。神と人間の離反関係を徹底的に見せつけてくれるものは、この僅かな数日間についた神と人間との激突関係に外ならない。決して、イエスが、きまり文句のように、ただ神さまの御命令によつて、淡々と十字架の上に追上げられて、死んだのではない。人類の罪というものが、神さまの前に完全にえぐり出されて、はつきり見せつけられて、もうこれ以上罪というものの実態は、底がないという程神さまの前に明々白々にされるところに、この十字架処刑の深い意味があるのではないか。

そこに、東洋における孔子や釈迦などに非常に高い人格的影響を受けておりながら、どうしてもそれだけでは、いま私共の魂の底にどす黒くとぐろを巻く罪を徹底的に認識し、それからの救いを得ることは出来ない。しかもそれが、観念としてならいざ知らず、歴史的事実の中で明らかにされることはないのではないか。釈迦や孔子が、非常に深い人生探究の導師であることはわかる。又それぞれが、大きな苦闘の後に、極めて高い世界観、人生観を打ち立てたことも否定しない。しかし、それだけでは、神と人間との決定的な出会いは起り得ないのではないか。どうしてもこれは、十字架という絶対絶命、引くに引けない状態を通して、始めて明らかにされることなのだと思う。「全世界をもうけても、命

を損するのでは、その人になんの得があろう。」と、イエスも言われる。(マタイ八・36)

もちろん、永遠の生命ということでイエスはこのことを仰言つておられるのだが、私共のこの肉体にある生命が、本当にもしここでなくなるならば、ここにいる友人たち、親兄弟が、どういう意味を持つだろうか。何といつても、私にとつて、最後に残るのは、私自身がいまこうして生きているという事実そのものである。しかも私は、肉体が滅びるものであることを徹底的に知っている。私は、私の力、又私以外の人間の力をもつては、私の肉体の生命を止めて置くことが絶体に出来ないことをも知っている。私は、生命がなぜ地球上に生れ出て来たかを知らない。私一個は単に偶然に生れ出た大きな生命の流れの泡沫に過ぎないのだろうか。イエスの生涯(それは十字架と復活まで含めて)は、私たちにこの生命の神秘について一さいを明らかにしてくれる。生命の意味と価値について、彼の死が、私たちの真の生であることを、彼の聖霊が私たちに教えるのである。

四、荒野より十字架へ

イエスの十字架への道程は、突然イエスが決意をされたより、あるいは、突然、当時の支配階級の人たちが、イエスの律法破壊者(即ち神への反逆者)の印の押しつけて処刑したのではなく、それらは、それぞれ一つの手段として用いられているが、むしろその

前哨戦は、荒野におけるイエスのたたかいにおいて、原形が決定されているように思う。イエスの公生涯のスタートにおける悪魔との戦いという、ある意味では抽象的かも知れないが、その戦いの中に彼の生涯のすべての原形、十字架の原形、復活の原形というものが、決定的に含まれているのではないかと思う。(マタイ四の1〜10) イエスと悪魔との問答の中で、超能力、奇蹟的な言行を求めているのは悪魔である。イエスは徹底的にこれを排除されている。後で学ぶ十字架上でのイエスに対する無名の群衆の悪口は、まさにこの悪魔の誘惑に類似する。(マタイ二七の39〜40 参照) 宇宙における自然の秩序は、神の定め給うたものである。人間は超自然的な能力に弱い。イエスは超自然的な能力を神の証明とされることに非常に警戒をされたふしがある。イエスほど自然の摂理を大切にされながら、自然の背後に父なる神のみ心を知っておられた方はほかにないと思う。神の造り給うた自然であり、神の定め給うた摂理である。神の子なるが故に十字架から突然下りて来て人々をあつといわせるような奇行によって、父なる神の真のみ心を人々に証明することは出来ないといエスは確信しておられたと思う。それは荒野における悪魔との対決で、明確にされていたことである。

ここでもう一度、十字架は避けることが出来ただろうかという問題にたちかえって考えてみたい。なぜイエスほどの力のある方が、ゲッセマネやゴルゴタにおいて、絶望的苦悶の声を発しながら、

ら、あえて十字架まで上ってゆかねばならなかったか、その理由が、試みの中にすでに解決されているように思う。

ユダヤ人の歴史の中で、予言者たちの予言の系譜は、共通して、神と人との深き隔離への橋渡しを予言する。しかし、神と人との間に横たわる深き断層、深淵は、人間の側からの力をもって埋めることは出来なかった。予言者たちは、神が自ら手をさし伸べて下さること以外に、この橋はかからぬことを知り、彼らが先祖から言い伝えとして受けついだなだめの供物の中にこの手段を啓示される。イエスの理解によれば、「なだめの供物」こそ「血の十字架」にほかならなかつたのである。例えば、イエスが、マタイ二六の53にあるように、十二軍団ほどの天使を援軍として送っていたことができなにかどうか。

仮にそれが出来たとしても、又それによって生身のイエスを救うことができたにしても、それが一体何を意味するのか、この十字架を避けることによって、果して人類に真の目覚めを与え、救いをもたらすことができるのかどうか、そのことを荒野における体験を通してすでにイエスは御存知であつたのではなからうか。その時から「予言の成就」という形で、マタイがしばしば表現する行動が、必然性をもって十字架への道、復活への道という一連の道程へつながつてゆくのではないかと思う。

次に本文について少し学んでみたい。全体として、共観福音書（マタイ、マルコ、ルカ）みなほぼ共通記事で埋められている。

若干の相違がルカとマタイにある。特にマタイでは、五二節から五四節にかけて、マタイ特有の記事、いわゆるマタイの特種が入っている。「剣によるものは、皆、剣によつて滅びる」がそれである。ヨハネでは、表現が少し違う。共観福音書が書かれた後で、ヨハネが何を書き足す必要があったかを多分意識して書いたのであろう。ヨハネでは神の子イエスの権威が堂々と語られる。

さて、マタイ二六章の47節であるが、「イエスの言葉が終らぬうちに、」は、46節の次の言葉に続く。「立て、行こう。見よ、」こういう簡潔な動詞だけで綴られた命令形の言葉、これは、極めて緊迫した状態の中におけるイエスの決意のほど、先にもいったようにすでにゲッセマネの園における祈りの結果、明確な啓示の有無にかかわらず、神にただ随うことのみを決意されたイエスの毅然とした態度を如実に示している。そこへ十二弟子の一人であるユダが、多勢の縛吏たちをつれてやつて来る。48節でユダはあらかじめイエスに接吻する手筈をきめて来ている。「わたくしが接吻する人がそれだ」ということは、縛吏たちが、イエスの顔も服装も知らなかったためか、或は夜中に来るので、判別し難いと考えたためか、外はちょうど満月だから、相当明るいはずであり、ここはやはり派遣された縛吏たちが、イエスを熟知する者ではないと解すべきであろう。

とすれば、大祭司を始めとする隠謀者たちが、いかにイエスを怖れていたか、また、自らは手を汚さず、ユダと無知な縛吏たちを物々しく武装させて、イエスの捕縛に万全を期したうかがわせる。その隠險さ、そのどんらんさは強かなるものである。

ここで言葉のほん訳の問題に少しふれてみたい。塚本訳、協会訳、旧協会訳で比較してみる。

塚本訳

「友よ、そのために来たのにはあるまいが、」「そのために」
は何のためにか、「私を売るために」 「友よ、そのために来たの
ではあるまいが」その「が」に、ここに至つてなおユダを愛する
イエスのあわれみへの情が、「友よ、」という呼びかけと共に胸に
迫るのを覚える。「ユダよ、お前が何も先頭に立つて来ることも
あるまいに：。」あわれみと叱責のニューアンスが読む者に感じ
られる。

協会の現行訳だと、「友よ、何のために来たのか」とあり、こ
れと塚本訳の相違を、何べんか口踊んで味つて頂きたいと思う。
ほんの二十字に足りぬ短かい言葉だが、微妙な違いがあることが
わかると思う。旧協会訳も「友よ、何とて来る」であり、現行
訳と変らない。何れがギリシヤ語原文に忠実であるか、また、原
語に機械的に忠実であることがよりよきほん訳といえるのかどう
か、ここで学問的価値を論ずるつもりはないが、イエスとユダの
関係をあれこれと思ひめぐらせながら、それぞれのほん訳者が、

信仰的眞実と、学問的良心とをそそぎ出して聖書を国語に訳出する場合、その一語一語にどれほどの苦しみをなめるか想像に難くない。むしろわれわれ素人が訳語の相違に着目して、著者は何を伝えようとしたかを考え、聖書の語句の重要さを再認識する機会となれば幸だと思ふ。

イエスは、ユダの反逆を最後の晩さんのときすでに予知し、それらしく予告もしている。(二六の25)にもかかわらず、これを阻止されたり、回避する方法をとられなかつた。

この世的な見方からすればイエスの最愛の弟子の一人を、自己陣営に引き入れた大祭司たちは、二重の意味で有利である。一つは、イエスを捕える時、どんな混乱の中でもユダなら見間違ふ心配がないこと。もう一つは、ユダの反逆を端緒として、イエスに対する民衆の離反、同時にイエス自身に手痛い衝撃を与えることができる。ユダを引き入れることに成功した時、彼らはおそらくかつさいして喜んだことであろう。事実捕縛、十字架の過程で、この予測は完べきな形で成就する。イエスはすべての弟子たちにも逆かれ離反されて、全き孤立の姿で十字架に上る。これ以上に完全な敗北がこの世にあるだろうか。この完全な敗北の意味について、敵も味方も誰一人理解する者はなかつた。父なる神と独り子のみ知りつつあえて実行されたのである。

諏訪熊太郎先生の

告別式に参別して

半田梅雄

一月二十七日鶴岡市の諏訪英一氏から電報を頂いた。「スワクマタロウ二六ヒ一―ジハンシヨテンニガツ一ヒゴニジワカバマチキョウカイニテコクベツシキアリ」とあつた。

たまたま、石原兵永先生の聖書の言誌一月号に、諏訪先生のユニークな信仰歴とその唯一の著書「信仰一人旅」が近く復刻されるとの記事を読んだばかりであつた。混沌とした世情の中で、純福音の旗を高く掲げるのにふさわしいよき事業とかげながら喜んでいた矢先だけにシヨックは大きかつた。何はさて置いても行かねばならぬそう心に決めて準備をした。

一月三十一日水戸発二十時三十一分、上野より上越回り急行天の川で鶴岡へ着いたのが翌二月一日七時五十八分であつた。雪は余り積つていなかったが、溶雪用の地下水が道路の中央部に噴出しているのが珍らしかつた。

駅前の旅館で休憩した後、タクシーで若葉町教会へ向つた。まだ時間が早いため、関係者二三人が準備をしているところであつた。

祭壇の中央部になつかしい先生のお写真が飾つてあつた。十四年十一月この地に先生をお訪ねしたことが昨日のことに思い出された。

告別式は、若葉町教会牧師鴻池雅氏の司式により次の順序で行われた。

一 奏楽 鴻池睦子氏

二 讚美歌 二八五

三 聖書朗読 ヨブ記一九、二五―二七

ヨハネ一、二五 二六

- 四 祈禱
- 五 故人畧歴
- 六 式辭
- 七 讚美歌
- 八 追悼の辭

四八九
 久保伊作氏
 森田外雄氏
 大滝龍蔵氏

九 頌栄 五四一

親族代表

- 一〇 終禱
- 一一 挨拶
- 一二 献花

参列者は約五十名程度、式終了後直ちに故人をしのぶ感話会がもたれた。ほとんどが五十年代六十代の人たちであった。

追悼の辞をのべられた久保伊作氏は、「信仰一人旅」の中に「久保伊作君の事」として詳記されている。その人となり隠健誠実、キリスト教入信は諏訪先生の超人的な働きとして後世に伝わる農村伝道を機縁とする。しかし、仏教的封建的の厳しい土地柄故に、親族より激しい迫害を受け、長男としての相続権を奪われ、細々と山中に独居を強いられつつも人を怨まず信仰に徹した人である。諏訪先生の思ひ出の中で、先生に喜寿の祝を皆が計画した時。先生はこれを固く辞退され、「私が婿に来る時、親戚知友が大いに祝ってくれた。私が天国へ旅立つ時はそれ以上に喜ばしい時だから大いに祝ってもらいたい」と申されたというエピソードを語られた。いかにも諏訪先生らしい、そしてそれを語る久保さんのとつとつとした言の葉に、限らない天父への愛と感謝に生かされている者の深い深いつながりを感じさせられた。私は、先生にお別れる為にはるばる鶴岡まで来たのではない。む

しろ天上の先生に力強い慰めと激励を与えて頂くために来たのだという確信が強まるのを覚えた。

森田外雄氏は、千葉県我孫子の人、二年前「信仰一人旅」を未見の諏訪先生から借読して、深く感動され、ほとんど独力で復刻の事業を進められ、先生の昇天直前の一月中旬、その第一冊を先生に献じられたという。ここにも一人の信仰者が、福音によって起たしめられるとき、地縁血縁等に関係なく、次々に道ばたの石ころからでも新しい生命を掘り越してゆく神のみ力のすばらしい事実を目の当りにする思いであった。

夕方五時近く、名ごりを惜しみつつ参列者は散会した。八時の急行に乗るまでの間、森田兄の好意で兄の宿泊旅館の一室で、互が諏訪先生と結びつきを頂いた経緯などつきない話の機会が与えられたことは感謝であった。

諏訪熊太郎著

信仰一人旅

復刻版

一、二〇〇円

東京都豊島区池袋四一三九五

キリスト教図書出版社

振替東京

一九二二七七

後記 謹んで第七五号をお届けします。諏訪先生と水戸については本誌第六八号にくわしい。信仰一人旅は初版分のほか著者の新序文、私の信仰の一文追加が写真も加わり内容豊富是非ご愛読を、又伝道用に最適、推奨します。梅開く。御平安を祈ります。

(半田)

水戸無教会 第七十五号
 昭和五十年 発行

水戸市緑町三一九一二六
 水戸幼稚園内

発行人 松本文助
 編集人 半田梅雄

(実費七十円 二十円)